

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	Homo Loquens <論文>
Author(s)	大庭, 拓郎
Citation	広大言語 , 11 : 4 - 6
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046360
Right	
Relation	



日頃、新聞等を読んでおもしろそうなものをメモしておいた中から少し書き出してみました。

☆ 水がメロメロと流れる

……「さらさら論争」というのが教育界にあった。ある教科書が「川は流れていく。さら。さる。る。ひらはる。どぶん。ぼん」という子どもの詩を掲載しようとした。ところが「川は。さらさら。と流れるべきだ」と文部省が反対して、この詩は教科書にのらなかった。……

(朝日新聞「天声人語」昭和45年8月21日)

∴擬声語には(鳥獣虫の声)、(人の声)、(万物の声)等をうつしたもので「川の流れる」音なども人によって受け取り方、感じ方が違うのも当然なのかもしれませんが、一般的には「さらさら」で代表されている。

さて、白石大二著「国語慣用句辞典」で擬声語を調べてみると、次のようにあった。

……ある音声を如何に感ずるかは、同一の民族でも時代によって必ずしも同一ではない。たとえば、室町時代のものに「田ガアリテ水ガメロメロト流ルル也」、「メタト酒ニ酔ウタ」、「骨鯨トハ魚ノ骨ノハットシタル処ヲ云ゾ」、「ムセリト(黙する様)シテ物ヲ言ハヌ」などあるは、その時代の人の「メロメロト」、「メタト」などの音声を聞いた時の感じが、水が流れ、酒に酔うた者などを見た時と、一致する所があった為と解される。……

☆ ボーナス

……「僕は書斎の置ごたつへはひり、2、3種の新聞を読みはじめた。新聞の記事は諸会社のボオナスや羽子板の売行きで持ち切つてゐた……」と、芥川龍之介『年末の1日』にある。大正14年12月のことだ。ボーナスという外来語が一般に使われだしたのは、そのころだろうか。

……語源はラテン語のボヌスで「よいもの」とか「善意」「財産」の意味が字引にあった。サラリーマンのサラリーも語源はラテン語で「塩」だ。むかし、塩を買うために兵士に与えたお金がサラリーだった。ふだんの月給で塩を買い、ボーナスは塩以外のものを買える「よいもの」と解釈すると、今日の生活実感にもびったり来る。……

(朝日新聞「天声人語」昭和45年12月6日)

∴ Dominus bonus servo benignus est.
(良い主人は奴隷に親切である)

学生時代のラテン語の練習問題である。机の前に変化表を貼って暗記したことが思い出される。

bonusの複数形はboniではなくて、bonuesを用いている。

……Some firms have used the money cut from entertainment expenses to pay bigger bonuses to ~~their employees~~ but some firms should use the money now being spent for entertainment to pay compensation for pollution.

(Asahi Evening News, "Vox populei, Vox Dei"

News

Saturday March 31, 1971)

☆ ヘドロ

ヘドロは静岡県で有名になり、田子ノ浦の代名詞のようになっている。語源を調べても全くの不明であれこれしていると、自由国民社出版「現代用語の基礎知識 1971」に次の様であった。

「元来、河口、沼、湖、湾の底に堆積する超軟弱な泥のこと。神奈川県津久井郡などの方言とも、土木、漁業関係の職業語ともいわれている。語源はハイ(灰)ドロ、イ(維)ドロなどの変化したものといわれるが定かでない。ここから駿河湾、東京湾などで工場廃水や産業廃棄物による公害問題では汚泥(汚染物質を含む泥)そのものをヘドロというようになった。……」

更に研究社、最所フミ著「英語にならない日本語によれば、

「Hydrogen Sulfide (硫化水素) generated in the sludge が正確な原語で、日本語に訛ったもの。しかし一般には ~~sludge~~ の意味に使われている」

とあった。

sludge

☆ She is a poet.

Woman Lib Doll が出現する程で世をあげてウーマン・リブ旋風が吹きまくった。英語にもその影響が見られ、She is a poetess. とは言わないで She is a poet. の方がよいとされるようである。英語学習する者にとっては男性形、女性形と苦勞しなくてもよいので好都合であるが、actor, actress; waiter, waitress など男性ではマネが出来なくて、女性でないとすまない語はそのまゝ生き残ることでしょう。こんなことから名詞が he, she, it のどの代名詞でうけているか興味が湧き、注意して新聞を読んでみると次のようなものがあった。

• Since a huge ship, which had been produced by shipbuilding technology of which Japan is proud, broke in half and sank, Japan has the responsibility of investigating the causes even for those countries to which she exports ships……

Twenty-four members of the crew of the California Maru were saved. This time, at least, the cause or causes of the sinking must be clarified. In this age of technical revolution it is shameful for Japan, which is, the top shipbuilding nation in the world, to leave unsolved the mystery of the "treacherous sea."

(Asahi Evening News "Vox populei, Vox Dei" Friday, February

13, 1970)

国名、都市名が擬人化されて用いられると、ラテン語の影響で She で受けるのが通例である。日本語では姉妹都市とは言いが兄弟都市とは言わない。上記の英文では Japan は she で受けるが接続詞と代名詞の一人二役をする関係代名詞では「物」につかわれる which が用いられているが、

whoの方がよいと思われる。

・「一姫、二トラ、三ダンプ」と恐れられている女性ドライバーではあるが街のここかしこスイスイと走っているがdriverはheで受ける。

It seems also that everyone is going around with a chip on his shoulder, taking the stand that he is going to live by himself as he likes. Can a human being live in such a manner?

For instance, isn't a driver able to go around in his car only because he is hoping that other drivers will adhere to the traffic laws and regulations.

・everyone, everybody は通例he で受けるが、男女両性を明らかに示すためには苦し紛れてhe or sheで受けている。

Everybody spoke out plainly just as he or she thought.

(curme): [英文法シリーズ] 五島忠久著より

・1971年2月号の中央公論に「書と字」と題して白井晟一氏(建築家)、白川静氏(立命館大学教授、中国文学)との対談の中で白川氏は次の様に述べていた。() ()

「ことばとは神のすみかであるといわれますが、文字は、存在をその形のうちに含む器です。われわれは1つの文字のうちに、そこに、1つの物体、1つの観念、1つの精神を見ることができる。1字1字がそれぞれの存在と意味をになうものとして、彼自身の小さな世界をもっているのだといえます。」

Cogito, ergo sum. デカルトの言った有名な言葉ですが、私達は、考えられる時には、各々の言語を用いて思考するわけですが、私達が外国語を学習する時に、語法、文法等と共にそれを母国語としている人々がその言語を用いて、どのような思考法、発想法をしているかということも学習する上で、大切なことではないかと思います。日本語と英語とを比較して、語法、文法と共に思考法、発想法を比較してみようと考えている近頃である。

(1971.8.)

万 葉 集 二 題

中 島 モ モ エ

2983 高麗劍^{こまろけん}己^{おの}が心から外^{そと}のみに見つや君に^{きみ}宛^{むか}ひ渡りなむ(作者不明)

万葉集巻12、物に寄せて思を陳ぶる歌百五十首の中の 一つ。「高麗劍」は高麗劍の^な又^{また}と同音の^な己^{おの}にかかる枕詞、己^{おの}は古い1人称代名詞。「朝鮮文化との関係」という観点から、万葉集を日本古典文学大系によって読み直して、目にとまった歌である。